

脳腫瘍委員会委員一覧（50音順）

荒川 芳輝

京都大学脳神経外科 教授



診療は、脳神経外科全般を対象にしています。特に脳腫瘍の診療に精力的に取り組んでいます。病状に応じた最適な診療を提供できるように心がけています。多くの臨床試験、治験を実施しながら、安全性と精度を高めた手術手技、新規化学療法レジメン、定位的放射線治療法の開発を行っています。新規の脳腫瘍治療を開発するために、脳腫瘍の発生と進展メカニズム、腫瘍免疫の分子機構の解析などの基礎研究も行っています。

石田裕二

静岡県立静岡がんセンター 副院長兼小児科部長

（準備中）

磯部 清孝

国立がん研究センター中央病院小児腫瘍科 医員



これまで小児科医として化学療法やトータルケアの面から脳腫瘍の治療に携わってきました。JCCG脳腫瘍委員会には2017年よりから参加しております。脳腫瘍委員会の活動を通じ、小児脳腫瘍に対する新規治療開発を行い、治療成績向上に貢献していきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

市村幸一

順天堂大学医学部脳疾患連携分野研究講座 特任教授

(準備中)

井原 哲

東京都立小児総合医療センター脳神経外科部長



2013年に現在の職場に赴任したのと時を同じくして小児がん拠点病院事業が開始となり、以来多くの脳腫瘍や脊髄腫瘍の治療に携わってきました。NPO 法人日本小児がん研究グループ（JCCG）脳腫瘍委員会での活動を通じて、小児脳腫瘍・脊髄腫瘍の治療成績の向上に貢献したいと考えています。また渉外・広報委員の一員として、JCCG 脳腫瘍委員会の活動をわかりやすく広報できるように努めてまいります。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

大場詩子

九州大学病院小児科 助教

(準備中)

香川 尚己

大阪大学脳神経外科 講師



現在まで後期試験ワーキンググループ、摘出度判定判定委員会などの仕事に携わってまいりました。今まで中央診断や進行中の臨床試験に積極的に症例登録を行ってきましたので、これからも症例の集積に努めたいと思います。現在はバイオロジー委員会にも参加させて頂いておりますので、遺伝子解析、画像解析等の研究に加えて、cultured cancer cellの組織収集、新しい臨床試験の立案など施設を挙げて尽力していきたいと考えております。これからも本邦の小児脳腫瘍研究の発展に貢献したいと思いますので、宜しくお願い致します。

金森 政之

東北大学病院脳神経外科 准教授



小児脳腫瘍の急性期外科治療、放射線化学療法の治療に携わってきました。また治療後の再発、二次性腫瘍、脳卒中、高次脳機能を含めた晩期障害についても自施設で多くの診療科、多職種チームで取り組んでいます。

しかし最近10年間で小児脳腫瘍医療は情報、経験の蓄積とともに実施すべき医療水準が飛躍的に向上し、一つの施設単独で取り組むことが難しくなっています。診断における分子診断、新規治療薬の開発、高次脳機能障害の評価・介入などはJCCGを中心とした日本全国レベルでの連携が不可欠であり、JCCG脳腫瘍委員会の活動を通じてこれらの発展に貢献してゆく所存です。

河村 淳史

兵庫県立こども病院小児がん医療センター次長 兼 脳神経外科診療科長



私は神戸大学では悪性脳腫瘍を専攻し2005年、兵庫県立こども病院に異動してからは小児脳・脊髄腫瘍に対する外科的治療の主導、化学療法や陽子線治療の検討、緩和治療に従事して参りました。現在は摘出術を施行した症例における晩期合併症の評価にも力を入れています。2013年2月より兵庫県立こども病院が厚労省が定める15小児がん拠点病院の一つに指定され、連携各科ときめ細やかな集学的治療を進め、他施設との連携を深めていくことで私の当院での経験症例数も350例を越えました。これらの臨床経験を元に今後の日本における治療、臨床研究、晩期合併症、緩和治療を支援して参りたいと思いますので、どうかお見知り置きのほどよろしくお願い申し上げます。

清谷 知賀子

国立成育医療研究センター小児がんセンター血液腫瘍科/長期フォローアップ科 医長



小児科専門医、血液専門医、小児血液・がん指導医で、小児腫瘍医として成育で脳腫瘍や固形腫瘍の臨床にも長く携わってきました。脳腫瘍委員会には主に小児脳腫瘍の化学療法の視点で関わってきましたが、長期フォローアップの観点から、小児脳腫瘍の長期的合併症や移行医療にも関わっています。今年から広報・渉外担当になりました。どうぞよろしくお願い致します。

康 勝好

埼玉県立小児医療センター血液腫瘍科 科長



当センターは早くから脳外科・血液腫瘍科・放射線科等が一体となって、小児脳腫瘍に対する集学的治療を実践してきました。小児脳腫瘍に対する臨床研究の立案・実行にも積極的に関与し、JCCG やその前身の1つであるJPBTCの臨床試験にも多くの症例を登録してきました。JCCG 脳腫瘍委員会の一員として、また運営委員会委員長として、今後も小児脳腫瘍に対する研究をさらに推進し、一人でも多くの子どもたちが健やかに治ることに貢献していきたいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

五味 玲

自治医科大学とちぎ子ども医療センター小児脳神経外科 教授



栃木県出身で、地元の自治医科大学を卒業後、地域医療勤務を経て、脳神経外科医となり、30年以上小児を中心とした脳腫瘍の臨床と研究に携わっています。JCCG 脳腫瘍委員会ではこれまで上衣腫臨床研究で摘出度判定の取りまとめ役をしていましたが、引き続き画像診断委員会を担当することになりました。まずは、橋神経膠腫の画像診断や上衣腫の摘出度判定などが中心になりそうです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

齋藤 竜太

名古屋大学脳神経外科 教授



成人～小児の脳腫瘍に対する手術・集学的治療から新規治療開発を専門としています。JCCG 脳腫瘍委員会では、上衣腫の新規臨床試験において研究代表者を担当しております。小児に好発する希少かつ難治の疾患に対して、全国一丸となって治療開発にあたるのが求められています。小児科・放射線科・病理等の先生方と共同で、治療成績の改善を目指して頑張ります。是非、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

鈴木 啓道

国立がん研究センター研究所脳腫瘍連携研究分野 分野長



私は脳腫瘍のゲノム解析・シーケンス解析を専門にし、最新技術を駆使して大規模データの解析を行っています。これまでに髄芽腫をはじめとし、新たな遺伝子異常の発見や分類法の提案などを行ってきました。このような大規模データを用いた包括的な解析技術は、脳腫瘍の臨床診断や基礎研究に欠かせません。これらの技術を通じて、日本の脳腫瘍診療に貢献し、世界でも誇れる基礎研究の成果を発信していきたいと考えています。

鈴木 智成

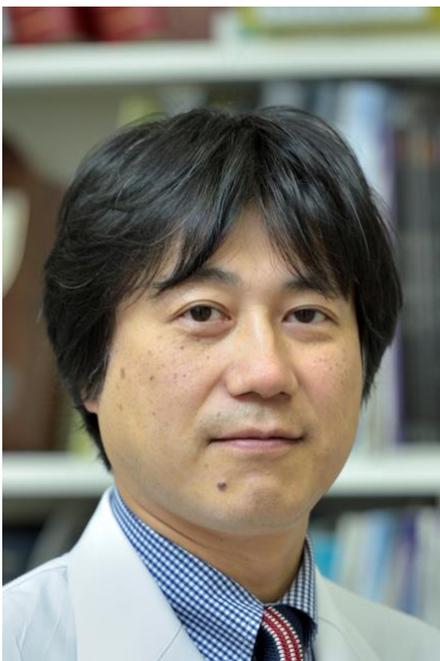
埼玉医科大学国際医療センター 脳脊髄腫瘍科 准教授



皆様こんにちは。現在、「びまん性内在性橋グリオーマ（DIPG）のレジストリ構築および緩和ケアの実態解明を目的とした多施設共同前方視的観察研究 JCCG DIPG-2023」の研究代表を務めております埼玉医科大学国際医療センター 脳脊髄腫瘍科の鈴木智成と申します。我々の施設の脳脊髄腫瘍科は脳神経外科のなかの脳腫瘍に特化した診療科で脳腫瘍全般の治療を行いますが、私は特に小児脳腫瘍の診療に尽力しています。同じ病棟に小児腫瘍科があり、小さなお子さんの診療や強い化学療法を行う際には協力して治療にあたっています。小児脳腫瘍の治療発展に貢献できればと考えております。どうぞよろしくお願い致します。

園田 順彦

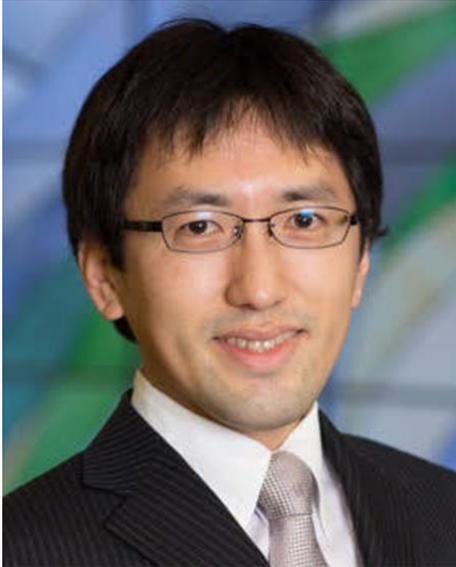
山形大学脳神経外科 教授



私は脳腫瘍全般の集学的治療を専門としていますが、特に脳腫瘍の外科手術を担当しています。小児脳腫瘍は頻度が少なく、多くの外科手術を経験している医師・病院は決して多くはありません。JCCGの活動を通じて、日本全国の小児脳腫瘍に関する経験や世界中の情報を共有できれば良いと考えています。また、まだまだ最適な治療法の見つかっていない病気に関してはJCCGから新たな治療法を確立できるよう努力していきたいと思っています。

高見 浩数

東京大学医学部附属病院脳神経外科 助教



東大病院では先進的な画像技術や手術支援技術を用いた正確な手術、ゲノム解析による迅速な診断とオンコパネル検査による最適な治療方針の推奨、従来の治療にとどまらず低副作用を目指した標的治療を行っております。小児科、脳外科、放射線科を含めた厚いネットワーク内での診療と共に、東大病院ならではの先端的研究機関との連携を利用した最適な治療を進めております。私もその一員として患者さんの日々のケアや治療の推進、またご家族へのサポートに努めております。東大病院で治療を受けて元気に回復していく患者さんが1人でも多くなるよう、これからも頑張ってみます。

多賀 崇

滋賀医科大学小児科 病院教授



私は、地域の大学病院で、長年小児がん診療に携わり、脳神経外科や放射線治療科と連携して、小児脳腫瘍診療を行ってきました。臨床研究としては、近畿小児癌研究会の脳腫瘍治療研究に長年参加して、主要な脳腫瘍の治療を行ってきました。また、JCCG血液腫瘍分解会では急性骨髄性白血病（AML）委員会の委員や委員長も務めてきました。これらの経験を活かし、JCCG脳腫瘍委員会には発足時から委員として参加し、活動しています。

竹内 正宣

横浜市立大学附属病院小児科 助教



小児血液腫瘍医として、化学療法を中心に脳腫瘍患者の診療に従事してきました。治療中や治療後に合併症を抱える子ども達と向き合う中で、少しでも脳腫瘍治療の発展に貢献したいという思いから、委員に応募いたしました。若輩者である私でも、臨床試験の円滑な遂行と新規臨床試験の立案に積極的に関与し、小児脳腫瘍治療のエビデンス構築に貢献できればと考えています。また、委員会を通して学んだ最新知識を所属施設のスタッフと共有し、患者様とそのご家族に還元できるように心がけていきます。

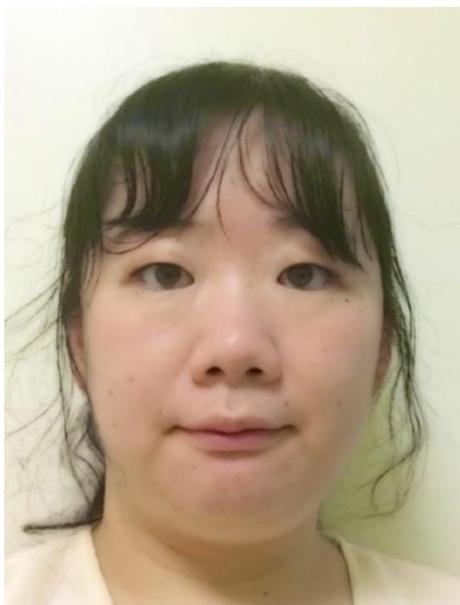
谷口 理恵子

静岡がんセンター小児科 医長



静岡こども病院、名古屋大学附属病院での勤務を経て、現在は静岡がんセンター小児科で主に骨軟部腫瘍や脳腫瘍の診療を行っています。JCCG 脳腫瘍委員会の中では、上衣腫臨床試験の立ち上げメンバーとして活動しています。全国の小児脳腫瘍の治療成績の向上に少しでも寄与できるよう力を尽くす所存です。がんと診断されたお子さんやそのご家族が、辛い気持ちを抱えながらも前を向いて進んでいけるよう、その支えになりたいと思っています。

谷口 真紀
広島大学小児科



小児科医として経験を積む中で、様々な専門科の先生と協力して、生命予後向上のみならず QOL 向上を目指すという小児脳腫瘍診療に魅力を感じました。一つ一つの疾患は患者数が決して多くなく、標準治療が確立されていない疾患も多く、より良い治療法の開発が希求されているこの分野。この分野で沢山の臨床試験を立案・運営されている脳腫瘍委員会に参加し、日々刺激をいただいています。少しでも貢献できるように努力しますので、どうぞよろしくお願いいたします。

谷村 一輝
大阪市立総合医療センター小児血液腫瘍科 医長



同施設で小児血液腫瘍医としてのキャリアを開始し、国立がん研究センター中央病院で2年間の修練医を経て現職となっております。JCCGとしては遺伝性腫瘍委員会を兼任しております。遺伝性腫瘍に興味を持ち、臨床遺伝専門医と遺伝性腫瘍専門医の取得を目指しています。また、がんゲノム医療に積極的に取り組んでおり、C-CATにもキュレーターとして関わらせていただいております。日本の小児脳腫瘍診療に、内科の立場から少しでも貢献できるように日々研鑽を積んでゆく所存です。よろしくお願いいたします。

辻本 信一

横浜市立大学小児科 助教



横浜市立大学小児科の辻本と申します。これまで小児がんの研究、診療に携わってきました。脳腫瘍では、ゲノム異常に基づいた治療・診断、新規治療の開発、臨床試験の立案に積極的にかかわっていかねばと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

鶴淵 隆夫

筑波大学医学医療系 脳神経外科 講師



当初は、成人の悪性神経膠腫、脊髄脊椎疾患を中心に診療しておりました。大学院卒業後、留学の機会を頂き、シカゴの富田忠則先生の下で Children's Memorial Research Center でマウスモデルを用いて、葉酸不応性の神経管閉鎖不全に関する研究を行ってきました。留学から戻ると、こども病院で小児神経外科の診療に携わるようになり、その後は、大学に戻り、小児神経外科も私のサブスペシャリティーの一つとなりました。今後は、小児脳腫瘍委員会の先生方の豊富な Neuro-Oncology に関する知識やご経験を学ばせていただきつつ、小児脳腫瘍の臨床研究に関して少しでもお役にたてるように邁進してまいります。今後ともご指導どうぞよろしくお願い申し上げます。

寺島 慶太

国立成育医療研究センター小児がんセンター脳神経腫瘍科 診療部長



1998年に名古屋大学医学部を卒業後、日米で小児科および小児血液腫瘍科の研修を行い、米国の小児脳腫瘍専門医となり、現在の施設で小児脳腫瘍の診療と研究に携わっています。JCCG脳腫瘍委員会の前委員長で、委員会の立ち上げ、脳腫瘍の中央病理・分子診断システムの構築、上衣腫・髄芽腫・AT/RT・胚細胞腫瘍の後期試験すべてにかかわっています。現在は小児脳腫瘍および神経線維腫症1型の新規治療法の臨床開発が一番の研究テーマで、複数の治験や先進医療の責任医師を務めています。また、脳腫瘍委員会の国際委員を拝命しました。JCCG本体では、胚細胞腫瘍委員、企画広報委員（副委員長）、総務委員を務めています。

中野 嘉子

東京大学医学部附属病院小児科 助教



脳腫瘍委員会の中では、JCCG小児固形腫瘍観察研究、中央診断のための脳腫瘍の遺伝子解析を主に担当しています。現在のWHO脳腫瘍の分類の基準にもとづく診断のためには、腫瘍の変異や融合遺伝子の検索、メチル化解析が欠かせない場合も少なくありません。解析の結果は、診断だけでなく標的治療の選択や、より精度の高い予後予測につながる場合もあります。JCCG施設や中央診断事務局、研究室、病理診断医の先生と協力しながら、この領域に少しでも貢献できればと考えています。

中村 英夫

久留米大学脳神経外科 脳腫瘍治療学 教授



2018年4月より熊本大学から久留米大学に移り、相変わらず脳腫瘍の臨床、研究に従事しています。小児脳腫瘍に関しては、主に福岡、佐賀、大分の3県からの紹介されてくることが多く、化学療法に関しては久留米大学小児科の先生方と共同で行っています。小児脳腫瘍の症例は年間10例程度ですが、良性腫瘍から悪性腫瘍までバラエティーに富んでおり、1例1例全精力を注いで、最適な治療を模索しながら行っています。それでも、なかなか治癒できない症例もありますので、もっと有効な分子標的薬などが開発されないかと心待ちにしているところです。

桑田 学

新潟大学 脳研究所 脳神経外科 特任准教授



この度、JCCG脳腫瘍委員会のシーズ開発WGおよびDIPG観察研究WGのメンバーに加わりました。私は脳外科医であり、小児および成人悪性脳腫瘍の診療に従事しています。また、小児悪性脳腫瘍の橋渡し研究を行うべく小さいラボを運営しており、そのために稀少な脳腫瘍の培養細胞株やPDXモデルの樹立や治療実験に力を注いでいます。小児脳腫瘍患者さまにより良い治療を提供するべく皆様と一緒にあれこれ考えて参りたいと思います。

新妻 秀剛

東北大学病院小児科 講師



東北大学病院では脳神経外科と小児科が協力して、多くの小児脳腫瘍患者さんの治療を行っており、私は主に外来での化学療法と治療後フォローアップを担当しています。JCCG 脳腫瘍委員会では、DIPG 前向き観察研究の事務局を担当しています。日本中の小児脳腫瘍診療に携わる人達が連携し、患者さんがどこにいても良い診療が受けられるよう、脳腫瘍委員会の活動を通じて貢献していきたいです。

花木 良

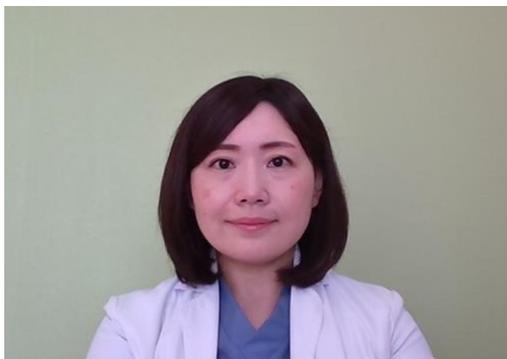
三重大学小児科 外来医長

No Photo

小児科の立場で、脳腫瘍の治療に携わらせて頂いています。診断、化学療法、分子標的薬の適応などを主に担当し、また、集学的治療が必要となる脳腫瘍の治療において、脳神経外科・放射線科先生方と一つのチームとして治療をお届けできるよう心掛けております。少しでも患者様・御家族のお力になれるよう、精進して参ります。

兵頭 さやか

兵庫県立こども病院血液・腫瘍内科 医長



複数の小児がん拠点病院で勤務し、脳腫瘍をはじめとする多くの小児がん患者様の診療に携わってまいりました。発症直後から、治療中の症状緩和、病気を克服された後のフォローアップに至るまで、多職種と連携しながら日々の診療に取り組んでいます。長い治療を行う中で、患者様が好きなこと、大切にしているものを一緒に大切にすることをいつも心掛けています。患者様とご家族に寄り添い、未来を見据えたより良い医療を目指して、これからも全力を尽くしていきます。

福岡 講平

埼玉県立小児医療センター 血液腫瘍科 医長



私は小児科医ですが、治癒が困難であったり、治療後の経過も難しい患者さんがまだまだ多い小児脳腫瘍の診療を少しでも改善したいという思いで、小児がんの中でも小児脳腫瘍に対する診療、研究を中心に今まで仕事をさせて頂いております。現在は埼玉県立小児医療センターにて勤務しております。2019年から脳腫瘍委員会に参加しており、さらなる小児脳腫瘍診療の向上に貢献できればと考えております。

福島 絃子

筑波大学医学医療系小児科 講師



筑波大学附属病院で勤務をしている小児科医です。専門領域は小児の血液、がん、遺伝性疾患です。普段は小児血液・がん専門医としての診療と人類遺伝専門医として遺伝領域の診療を行っています。また当院は陽子線治療施設があることから、陽子線を必要とする患者様を多く受け入れています。研究領域では主として小児がんの胚細胞系遺伝子解析、小児がんサバイバーの問題に取り組んでいます。小児がんの長期的な生存率は飛躍的に改善しました。その中でも小児脳腫瘍は未だ満足のいく成績の得られない疾患が複数存在しています。脳腫瘍を持つこともたちの治療成績の向上と幸せのために微力ながら助力していきたいと考えています。

前林 勝也

日本医科大学医学部附属病院放射線科 臨床教授



放射線治療を担当している前林です。脳腫瘍などの固形腫瘍の治療では、根治を期待するために放射線治療が必要となることが多いです。放射線治療は臓器を摘出することなく治療が可能であるため、同じ範囲の手術に比べるとQOL（Quality of Life）の低下が少ないと考えられています。しかし、小児の場合には、放射線治療が行われることで成長や発達に問題が生じることがありますので、この脳腫瘍委員会で治療効果を落とさずに、できるだけ放射線治療の照射範囲や投与線量の低減を目指した治療開発を検討していきたいと考えています。

室井 愛

筑波大学脳神経外科 講師



小児神経外科全般を専門にしています。脳神経外科医としては安全な手術を心がけていますがまだまだ学ぶことばかりであると実感しています。大学病院の小児神経外科医として初期治療だけでなく、成人期の外来診療も担当しています。治療にまつわる様々な晩期合併症のみならず、スポーツドクターでもあるため運動などを通じた患者の健康維持などに興味を持っています。

山口 秀

北海道大学脳神経外科 診療准教授



2019年より本委員会委員を務めさせていただいています。脳腫瘍全般の治療に携わっていますが、特に小児脳腫瘍に対しては、脳外科医として働き始めて以来、深くかかわってきました。また、脳外科単科ではこの分野の治療進歩は限られると考え、診療科の垣根を超えたチーム医療の構築にも力を注いできました。小児脳腫瘍は一人一人の患者さんが特別であり、どんなにたくさんの経験をして、次の患者さんでまた新たな壁にぶつかる、ということの繰り返しです。常に知識を更新して、小児脳腫瘍患者さんに最善の治療を提供できるよう、努力しています。

山崎 夏維

大阪市立総合医療センター 小児血液腫瘍科 医長



私は普段多くの小児がんのこども達の診療に携わっていますが、脳腫瘍は中でも特に難しい疾患です。診断や治療の困難さに加えて、こどもたちは治療後も認知機能障害や内分泌障害などの様々な困難に向き合う事になるため、専門家だけでなく、多くの人々の支えが必要です。これまでのJCCGの活動を通じて小児科・脳外科・放射線科・病理診断科など治療に関わる専門家の連携が進みました。今後は治療後のフォローアップに関わる専門家や、多くのご家族、そして我々の活動をご支援いただける一般の方々との連携を広げていく事が重要です。脳腫瘍のこどもたちに、いつでも最新の診断・治療・支援を届けられるよう尽力して参りたいと思います。

山崎 文之

広島大学脳神経外科 准教授



小児脳腫瘍の手術を専門とします。手術、放射線治療、化学療法、分子標的療法、免疫療法、緩和治療、支持療法などの集学的治療の方針を患者さんの状態に合わせて相談しながら決定します。小児がんサバイバーの晩期障害、脳の変化やホルモン分泌とその対策について研究を続けています。神経画像診断に詳しく、腫瘍と非腫瘍性疾患の鑑別や腫瘍の再発診断を最新の画像診断技術を駆使して行います。小児脳腫瘍の治療成績を向上させるため、成人癌の知識を勉強することを心がけ、臨床試験のプロトコール作成、治療開発を学んできました。JCCGでもそれらの知識を活用して小児脳腫瘍の治療成績を向上させるためのチームの一員として努力します。

山本 哲哉

横浜市立大学附属病院脳神経外科 主任教授

(準備中)

湯坐有希

東京都立小児総合医療センター血液・腫瘍科 部長

(準備中)

吉田秀樹

京都府立医科大学小児科 助教



もともと血液腫瘍を含め、小児悪性疾患を幅広く臨床・研究の対象にしておりましたが、大学病院への赴任に伴い、脳腫瘍の患者様の診療により多く関わらせていただく運びとなりました。課題を感じつつも、非常に学びが多く、やりがいのある分野と痛感し、小児科医として少しでも何かお役に立てたらと思い、このたび脳腫瘍委員会に応募させていただきました。「即戦力」とはいきませんが、更なる生命予後の改善（新規治療の導入、分子・遺伝子分類による層別化、再発例に対する治療戦略など）や、少しでもADLを悪化させない治療（正確なリスクに応じた治療強度の設定、高次脳機能障害の軽減など）の追及に微力ながら貢献できましたら幸いです。

吉本 幸司

九州大学脳神経外科学分野 教授



小児脳腫瘍を含めた脳腫瘍の手術治療、基礎研究を専門としています。現在の JCCG の脳腫瘍委員会では、シーズ開発 WG で山口先生をサポートする立場で活動しております。当院でも小児科の先生と常にコミュニケーションを取りながら小児脳腫瘍の治療を行っていますが、JCCG でも小児科医と脳神経外科医が自由に議論できる環境で、小児脳腫瘍の治療成績向上を目指して活動していきたいと思えます。

渡辺 祐子

国立がん研究センター中央病院小児腫瘍科 医員



わたくしは学生実習の時分におひとりの難治性の小児がんのお子さんとそのご家族に出会い、小児がんを専門にすることを決意しました。その患者さんからいただいた経験や知識を次の患者さんに活かしたい、そして活かす責任があるという Pay it forward の思いの連鎖で、これまで小児がんの診療や研究に携わらせていただきました。

その中でも、特に本邦の小児脳脊髄腫瘍の診療体制整備や治療向上に貢献したいと考えるようになり、2014 年の日本小児がん研究グループ (JCCG) 脳腫瘍委員会設立以降、小児科、脳神経外科、放射線治療科、病理診断、遺伝子診療、バイオロジー研究、ほか様々な分野の諸先輩に導かれ、課題解決にむけて活動してまいりました。

小児脳脊髄腫瘍に限りませんが小児がんについては、新規の治療法を切望している患者さんやご家族のご期待にお答えできていない現状と認識しております。しかしこのたび第四期がん対策推進基本計画における小児・AYA がん対策に関する施策が発表され、小児がんにとっては歴史的な転換期を迎えようとしています。ぜひともこの機会に小児脳脊髄腫瘍の診断治療開発がすすむよう、ますます努力して参ります。